

杯（森鷗外）

温泉宿から鼓が滝へ登って行く途中に、清冽な泉が湧き出ている。

水は井桁の上に凸面をなして、盛り上げたようになって、余ったのは四方へ流れ落ちるのである。

青い美しい苔が井桁の外を掩うている。

夏の朝である。

泉を繞る木々の梢には、今まで立ち籠めていた靄が、まだちぎれちぎれになつて残っている。

万斛の玉を転ばすような音をさせて流れている谷川に沿うて登る小道を、温泉宿の方から数人の人が登って来るらしい。

賑やかに話しながら近づいて来る。

小鳥が群がつて囀るような声である。

皆子供に違ない。女の子に違ない。

「早くいらっしゃいよ。いつでもあなたは遅れるのね。早くよ」

「待っていらっしゃいよ。石がごろごろしていて歩きにくいのですもの」

後れ先立つ娘の子の、同じような洗髪を結んだ、真赤な、幅の広いリボンが、ひらひらと蝶が群れて飛ぶように見えて来る。

これもお揃の、藍色の勝った湯帷子の袖が翻る。足に穿いているのも、お揃の、赤い端緒の草履である。

「わたし一番よ」

「あら。ずるいわ」

先を争うて泉の傍に寄る。七人である。

年は皆十一二位に見える。きょうだいにしては、余り粒が揃っている。皆美しく、稍々なまめかしい。お友達であらう。

この七顆の珊瑚の珠を貫くのは何の緒か。誰が連れて温泉宿には来ているのだらう。

漂う白雲の間を漏れて、木々の梢を今一度漏れて、朝日の光が荒い縞のように泉の畔に差す。

真赤なりボンの幾つかが燃える。

娘の一人が口に銜んでいる丹波酸漿を膨らませて出して、泉の真中に投げた。

凸面をなして、盛り上げたようになっていて水の上に投げた。

酸漿は二三度くるくると廻って、井桁の外へ流れ落ちた。

「あら。直ぐにおっこつてしまふのね。わたしどうなるかと思つて、楽しみにして遣つて見たのだわ」

「そりゃあおっこちるわ」

「おっこちるということが前から分つていて」

「分つていてよ」

「嘘ばっかし」

打つ真似をする。藍染の湯帷子の袖が翻る。

「早く飲みましょう」

「そうそう。飲みに来たのだったわ」

「忘れていたの」

「ええ」

「まあ、いやだ」

手ん手に懷ふかしを搜さがつて杯を取り出した。
青白い光が七本の手から流れる。

皆銀の杯である。大きな銀の杯である。

日が丁度一ぱいに差して来て、七つの杯はいよいよ耀かがやく。

七条の銀の蛇へびが泉を繞まわつて奔はしる。

銀の杯はお揃で、どれにも二字の銘がある。

それは自然の二字である。

妙な字体で書いてある。何か 抛ながあつて書いたものか。

それとも独創の文字か。

かわるがわる泉を汲くんで飲む。

濃い紅の唇くちびるを尖とがらせ、桃色の頬ほおを膨はらませて飲むのである。

木立のところどころで、じいじいという声がする。蟬せみが声を試みるのである。

白い雲が散つてしまつて、日盛りになつたら、山をゆるする声になるのであろう。

この時只一人坂道を登つて来て、七人の娘の背後に立つて
いる娘がある。

第八の娘である。

背は七人の娘より高い。十四五になつているのであろう。

黄金色の髪を黒いリボンで結んでいる。

琥珀こはくのような顔から、サントオレアの花のような青い目が覗のぞいている。永遠の驚もを以て自然を覗のぞいている。

唇だけがほのかに赤い。

黒の縁へりを取った鼠色の洋服を着ている。

東洋で生れた西洋人の子か。それとも相あの子か。

第八の娘は裳ものかくしから杯を出した。
小さい杯である。

どこの陶器か。火の坑あなから流れ出た熔と融ようの冷めたような色
をしている。

七人の娘は飲んでしまった。杯を漬つけけた迹あとのコンサントリ
ックな圈わが泉の面に消えた。

凸面をなして、盛り上げたようになっていゝる泉の面に消え
た。

第八の娘は、藍染の湯帷子の袖と袖との間をわけて、井桁
の傍に進み寄つた。

七人の娘は、この時始てこの平和の破壊者のあるのを知つ
た。

そしてその琥珀いろの手に持っている、黒ずんだ、小さい
杯を見た。

思い掛けない事である。

七つの濃い紅の唇は開いたままで詞ことばがない。

蟬はじいじいと鳴いている。

良久やうしい間、只蟬の音がするばかりであつた。

一人の娘がようようの事でこう云つた。

「お前さんも飲むの」

声は訝いふかりに少しの嘖いかりを帯びていた。

第八の娘は黙つて頷うなずいた。

今一人の娘がこう云つた。

「お前さんの杯は妙な杯ね。一寸拝見」

声は訝に少しの侮あなどを帯びていた。

第八の娘は黙つて、その熔と融ようの色をした杯を出した。

小さい杯は琥珀いろの手の、臄^{すく}ばかりから出来ているような指を離れて、薄紅のむっくりした、一つの手から他の手に渡った。

「まあ、変にくすんだ色だこと」

「これでも瀬戸物でしょうか」

「石じゃあないの」

「火事場の灰の中から拾って来たような物なのね」

「墓の中から掘り出したようだわ」

「墓の中は良かったね」

七つの喉^{のど}から銀の鈴を振るような笑声が出た。

第八の娘は両^{りょうのひ}臂を自然の重みで垂れて、サントオレアの花のような目は只じいつと空^{くう}を見ている。

一人の娘が又こう云った。

「馬鹿に小さいのね」

今一人が云った。

「そうね。こんな物じゃあ飲まれはしないわ」

今一人が云った。

「あたいのを借^かそうかしら」

懨^{あわれみ}の声である。

そして自然の銘のある、耀く銀の、大きな杯を、第八の娘の前に出した。

第八の娘の、今まで結んでいた唇が、この時始て開かれた。

“ MON. VERRE. NEST. PAS. GRAND. MAIS. JE. BOIS.
DANS. MON. VERRE.”

沈んだ、しかも鋭い声であった。

「わたくしの杯は大きくはございません。それでもわたくし

はわたくしの杯で戴^{いた}きます」と云ったのである。

七人の娘は可哀らしい、黒い瞳^{ひとみ}で顔を見合った。

言語が通ぜないのである。

第八の娘の両臂は自然の重みで垂れている。

言語は通ぜないでも好い。

第八の娘の態度は第八の娘の意志を表白して、誤解すべき余地を留めない。

一人の娘は銀の杯を引っ込めた。

自然の銘のある、耀く銀の、大きな杯を引っ込めた。

今一人の娘は黒い杯を返した。

火の坑から湧き出た熔巖の冷めたような色をした、黒ずんだ、小さい杯を返した。

第八の娘は徐^{しず}かに数滴の泉を汲んで、ほのかに赤い唇を潤した。